DERK and LIGHT

燐洸蘭歌

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＤＥＲＫ　ａｎｄ　ＬＩＧＨＴ

【Ｎコード】
Ｎ７８７１Ｃ

【作者名】
燐洸蘭歌

【あらすじ】
日常から「非」日常に。何ぜ彼らが？

プロローグ

「これで終わったと思うなよ・・・」

そういい遺して魔王は消え去る。

魔王を倒した１０人はすべてのものから『勇者』と言われ尊敬された。

しかし１０人が死んだ後、再び魔王が復活する。

人々は『勇者』が使ったものを使い魔王を封印する。

封印したとき誰かが

「この封印は『勇者』の生まれ変わり、もしくは魔王の生まれ変わりでないととく事は出来ないが、生まれ変わりが生まれる可能性は低い」

と、言った。

それでも人々はいつか封印はとかれてしまうだろう。そう思っていたがあるものが

「もう一つの世界にこれを封印しよう」

そういい、封印に使われた品々はもう一つの世界に保管される。

これで封印を解かれる心配は無いはずだった

しかし、封印がとかれるとは誰も思っていなかった・・・・

そして再び災いが起きるとも思わなかった・・・

そして、もう一つの世界の１０人の運命が変わる事も・・

プロローグ完

登場人物紹介

名前／年齢／一言メモの順に紹介します

神保龍太郎（ジンボ リュウタロウ）／１２／市立藤樹小学校５年生。皆とよく悪戯を考える。リーダー的存在。呼び名は神竜

湯島大夢（ユシマ ヒロム）／１２／市立藤樹小学校５年生。目がいいため悪戯を仕掛けるときには見張り役。呼び名はタイム

針野一毅（ハリノ カズキ）／１２／市立藤樹小学校５年生。悪戯を仕掛けては逃げ送れて怒られる。呼び名はハリ

古柳駿（フルヤナギ シュン）／１２／市立藤樹小学校５年生。無口だが頭がいいため考える悪戯はかなりの物。呼び名はしゅん

小菅京太郎（コスゲ ケイタロウ）／１２／市立藤樹小学校５年生。いつも悪戯の出来具合を調べる時に実験台にされる。呼び名は京太（けいた）

森麻里江（モリ マリエ）／１２／市立藤樹小学校５年生。悪戯の装置を作る事が多い。呼び名はまりえ

小野沙智（オノ サチ）／１２／市立藤樹小学校５年生。悪戯の考える事が多いがほとんどがかなり悪質。呼び名は沙智

小原彩（コハラ アヤ）／１２／市立藤樹小学校５年生。背が高いため高いところにセットする場合はいつもやっている。呼び名はコハ

中西由梨（ナカニシ ユリ）／１２／市立藤樹小学校５年生。一番まともに見えるが２重人格。悪戯と言うよりも殺人に近くなる事も呼び名は由梨

谷澤真波（タニサワ マナミ）／１２／市立藤樹小学校５年生。悪戯の後始末をいつもやっている。呼び名はまな

ソドム、ゴーン、銀狼／正体不明。こいつらのせいで１０人の運命が変わる

第1章始まり

「どうすれば魔王様を解き放つ事が出来るか・・・」

真っ暗な部屋の中何人かが話し合っている。

「もう一つの世界に行って封印をとくしかないでしょう」

「そうだな」

「だが、われわれにはとく事が出来ない。それに向こうの人間もだ」

何の話だかわからないが何かのたくらみのようだ。

ボワ

ろうそくに灯がともる。しかし顔は見えない

「向こうにあいつらの生まれ変わりがいる。そいつらにとかせよう」

「だが、誰が向こうに行く」

その発言のあとしばらく沈黙が流れる

「・・・・ここは銀狼、お前が行ってくれ」

「・・・・・・・・・・・・わかった」

銀狼と呼ばれた、たぶん男だと思われる人物が何かを唱える。
そのとき一瞬見えた顔は狼だった・・・
唱え終わるとそこに狼はいず、男が居た。
そして再び何かを唱える。
次の瞬間そこには誰もいない。
「行ったようだな。われわれも戻るとするか」
一瞬ろうそくが揺らぐ。その短い間に
誰もいなくなった

場所は変わり、２０ＸＸ年日本のどこか。
ここは西市立藤樹小学校。市立と言っても市の外れのほうだから生徒は１年から６年までで３０人しかいない。
そんな学校の５年生の１０人は悪戯１０人組といわれているほど悪戯をよくやる。
「今日はどんな悪戯をやる？」
朝皆が集まってからリーダー的存在の神保龍太郎が言う。
「ドアに輪ゴムをつけといてあけてもすぐ締まるドアとかは？」

小野沙智は皆が認める腹黒女である。彼女の発言は時に「殺人トラップ」を作りかねない

「やめとこうよ」

そんな発言を何としても取り消そうとするのが小菅京太郎。何時も実験台にされるため取り消そうとする。

「今日はシンプルに黒板消し落しにしよう」

そう言ったのは古柳駿。無口だが考える悪戯は相当のもの

「じゃあ決定で。早速仕掛けよう」

妙にルンルン声で言ったのは皆が認める2重人格者中西由梨。

「あんまり派手にやらないでよ。片付け大変なんだから」

本を読みつつ忠告を入れたのは谷澤真波。後片付けは彼女の仕事なのである。

「大丈夫だよ。そしたらタイムと、ハリは見張り御願いね。コハはトラップしかけるの頼むね」

指示を出しているのは森麻里江

「またかよ」

この発言はタイムこと湯島大夢

「しゃあねえなあ」

これはハリこと、針野一毅

「ドアの上でいいよね」

これはコハこと小原彩

そんな会話が交わされる。

2分後準備が出来る。後は先生が来れば完璧だ。

そして・・・

「出席をとｒ・・ゴフ」

見事先生の頭上に黒板けしが落ちる。

「お前ら・・・・今日と言う今日は許さん。放課後居残りだ」

そう命令して出席を取る。

みんなの気持ちは成功した時から一気にしぼんでいった

キーンコーンカーンコーンキーンコーンカーンコーン

「よし今日はここまで。さっさと帰りの学活やって居残りだ」
先生はしっかり居残りの事を覚えていた。
こういうときに限って学活は早く終わる。
「さてと、今回の居残り課題は・・・今から言う5つのものを取ってきて欲しい」
「え、ただ単にぱしってるだけじゃないですか？」
大夢が、正当なツッコミを入れる。さらに
「それなら先生が取りにいけばいいのに」
一毅も正当なツッコミを入れる
「う・・・・と、とにかく、もってくるのは『封印の書』『封印の剣』『封印の弓』『封印の牙』『封印の槍』以上5ついいな」
「はあい」
やる気の無い返事をして2人組みぐらいに別れ探す。
先生だけが残った教室・・・・
「ふふふ・・・これで封印が解ける・・・」
先生の顔が一瞬『あの』狼の顔になる
しかしそれは一瞬で再びもとの先生の顔になる

「ここにあるの～？」

「確かあったよ。ってかうち図書委員だし」

こんな会話をしているのは『封印の書』を探しにきた麻里江と彩である。ちなみに図書委員は彩。

「確かAの棚の2段目だったと思ったけど・・」

「Aの2？えっと・・・・・・あ、あったよ」

そう言って麻里江が持ってきた本は厚めの本で少し変色している

「一寸読んでみようよ」
好奇心から麻里江は持っていた本を開く。
その瞬間

本から光が迸る

そして何かが飛び出す。
それは窓の外に飛び出し消える。

「何だったの？あれ？」
彩が麻里江にたずねるが
「わからない・・とにかく戻ろう」
そう言って本を抱えて教室に戻る

「ねえ沙智～平気かな入っちゃって？」

「いいんじゃない？一応先生に頼まれてるんだし」

由梨と沙智は『封印の牙』を探している。
そのために普段は入ってはいけない、理科準備室にいるのである。
しかしどの学校でも同じように理科準備室はものすごい不気味である

「けどかなり不気味だよ・・・」

「由梨、そんな弱音吐かないでよ・・・あ、あったよ」

そう言って沙智はガラスケースを開け中に入っているもの
すなわち牙に手を伸ばす。

そして触れた瞬間

光が迸り

何かが飛び出す

それはその場で消えた・・・

「な、なに？あ、あれ？」

「わからない・・戻ろう。ってそんなに引っ付かないで」

由梨は沙智にものすごい引っ付いているのである。

そんな由梨を半ば引っ張るようにして沙智は教室に向かう

「ねえハリ～、ここって校長室だよ勝手に入って平気なの」

「ばれなきゃいいじゃん」

大夢と、一毅は校長室にある『封印の槍』を探しにきた
本来校長室には生徒は無断で入ってはいけない。
そのため2人はばれたら大変な事になる。
「ないねぇ」
「うん・・・あ、あったよ。あれじゃない？」
一毅が指差した所には一本の槍が飾ってあった
「じゃ、もっていこう」
そう言って大夢が手を伸ばし槍をつかんだ瞬間
光が迸り
何かが飛び出す。
それは暖炉の中へと消えた
「何あれ？」
「知らないよそんなの。とにかく帰ろう」
そう言って二人は見つからないように校長室を出て教室に向かった

「ここって生徒立ち入り禁止だろ」

「まあ気にするな。音楽準備室に入った事がばれなきゃいいんだし」

龍太郎と京太郎は『封印の弓』を探しに音楽準備室に来ている。
本来は立ち入り禁止なのだが京太郎は普段から入っているため平然と探す。

「ないなあ」

「これじゃないの？」

そう言って龍太郎が一つのものに手を伸ばし握る。
握った瞬間

光が迸り
何かが現れそして消える

「な、何だあれ？」

「知らない。ってかさ京太って気づくの遅いよな」
微妙に龍太郎に文句を言われ、少しすねつつも、
二人して教室に帰る

「なんか名前にてるよな、僕たち」
京太郎はそんな事を言っていた

真波と、駿の二人は『封印の剣』を探して校庭にある記念碑まで行く。

「これの事だよね」

「多分」

駿が剣に手を伸ばし引き抜く。
その瞬間

光が迸り

何かが飛び出す
それは空の彼方に消える。

「何あれ・・・・」

「なんか抜いちゃいけなかったみたいだね」

「うーん・・・あ、もしかしてこれって・・・」

「とにかく教室に戻ろう」

二人は教室に向かって駆け出す。

このときは誰もわかっていない

この行動で運命が変わるなんて

１０人が続々と戻ってくる。しかしそこに先生の姿はなく、替わりに狼が居た

「な、何あいつ・・・」

由梨は完全に怖がっている。

「くっくっくっく。ありがとなお陰で魔王様の封印をとく事が出来た」

「お前誰だ」

龍太郎がその狼に問い掛ける

「俺の名は銀狼。魔王様の側近３人衆の一人だ。ま、とにかくお前達をけさねーとな」

そう言って何か唱える。

「じゃ、消えろ」

そう言った瞬間銀狼の手から真っ黒い光が飛び出し１０人に向かって飛んでくる。

それが１０人に触れる瞬間、それぞれが持ってきた者が光だし黒い光とぶつかる。

「あ、そっか、まな、タイム、神竜、沙智、コハ前に出て」

駿が叫ぶ。５人はそれぞれもって前に出る。

それと同時に二つの光がぶつかるのも強くなる。そして・・・

ドーーーン

爆発がおき、煙が晴れたときには１０人はそこにいなかった。

「・・・・消す事が出来たか、向こうに行ったかどっちかだな・・・」

一人でそんな事を言った後、銀狼も消える。

第１章始まり完

第2章異世界

龍太郎視点

ったく・・・ここどこだよ!!
思わず叫びたくなってしまう。あの時爆発が起きて意識を失った。
それでさっき目がさめたら全く知らない所にいた。

「神龍大丈・・って神龍お前なんか変だぞ。髪とか服装とか。それに目の色は青だし・・・」

駿にいわれて服装を見ると簡単な鎧に黒いマントと言う格好だ。
そして髪の色は・・

「き、金色?!・・・って駿お前も変だぞ。それに目の色は赤だし・・」

駿は青い服の上に紅いマントと言う格好で髪の色は銀色だ。
みんなも同じような感じで、

タイムは青い髪に黒っぽい緑の鎧を着ている

ハリは茶色い髪で全身鎧で包まれている

京太は水色がかった銀色の髪で魔法使いとかが着るような長い緑のローブを着ている。

まりえは黒い髪をお団子（って言うんだっけ）にしていてチャイナドレスみたいな服を着ている。

沙智は僕と同じような金色の髪で青い服を着ていて、青い帽子もかぶっている。

まなは赤い髪を二つに結んでいて緑色のワンピースを着ている

コハは緑の髪で赤い上着と短いスカートを着ている。

由梨は黄緑の髪で黄色いリボンを頭に結び白いローブを着ている。

それに小学校2年生といっても通りそうな感じだ。

「何がどうなってるのか・・・・さっぱり分からない」

コハが言う。確かによく分からない。何でこんな格好なのかもここがどこなのかも。

「とにかく、近くに町があるみたいだからそこまで行こう」

駿がそう言ってみんなで歩く事にした。

このあと問題がおこるとも知らずに

駿視点

あれから2時間ぐらい歩いて町につくと、人だかりが出来ている。

「見てくるね」

そう言って由梨は人垣の間をすり抜けて前に行く。しばらくして戻ってきた時は何故か慌てていた。

そして僕らを人垣から離れた所に連れて行くと小さな声で
「指名手配みたいな感じなんだけど、それが私たちなの」
ふーん・・・って何故？
「どうする？下手に名前出すと危険だし・・・」
麻里江がいう。ほんとどうするか・・
「偽名でも考える？そうすれば平気じゃん」
彩が言う。それはそれでいいけど・・・
いつもの癖でポケットに手を突っ込む。すると何かがふれる。
なんだろうと思って出してみると小さな紙が入っていた
それには『クロウ』とだけかいてあった
「駿、それなんだ？」
「ポケットに入ってた」
神龍に聞かれて答える。
「あ、そう言えば私も入ってたよ。もしかしたらみんなもあるんじゃない？」
そう言ってまなも同じような紙を取り出す。
それには『マゼンダ』と書いてあった。
「本当だ」

みんなもそれぞれ見つける。ついでに言うと
神龍は『ブロント』で、タイムは『ブルース』、ハリは『ジルバ』、京太は『ルファ』麻里江は『リン』、沙智は『テミ』、コハは『ミドリ』、由梨は『ティンク』

「どうせだったらこれを偽名って事で使おう。それに普段呼ぶときもこれで呼ぼう」

麻里江がそう言って、これで呼ぶことにした。

大夢視点

呼び方が決まり、誰がなんていうのかを覚えようと頑張っていた時町の人の会話が耳に入る

「なあ、知ってるか？魔王が復活したって・・・」

「それにスライムとかの魔物もまた増え出したし」

「ガーゴイルとかが飛んでいるのを見た奴もいるし」

「本当かよ。前みたいにこっちに連れてこられる人も居るかもな・・・」

「それに下手に襲われてもこまる」

「子供達だけでは町の外に出さないようにしないと」

「ここまで来ないといいけど」

連れてこられる?!もしかして僕たちもそれで・・・

「帰る方法わかんねーし、魔王を倒しに行くか?」

神龍がそう言う。このまま居ても帰る方法が分かるわけないからそうしようということになった。

幸い目がさめた時、側に武器もあったしそれを使えばいいということになった。

ここから僕たちの冒険が始まった。

第2章完

第3章草原（前書き）

『』の中は呼び名です

神龍『ブロント』／主に剣を使う。この中でのリーダー

京太『ルファ』／雷と氷の魔法を使う。（いじられキャラ）

タイム『ブルース』／弓矢を使う。目がいいのは健在

ハリ『ジルバ』／槍を使う。足が遅いのは仕方ない

駿『クロウ』／剣を使う。発言数が少ない

麻里江『リン』／格闘技系の攻撃をする。切れたら危険人物

沙智『テミ』／回復担当。見た目は優しそう、本性は腹黒

コハ『ミドリ』／斧を使う。リンとつるむ事あり

由梨『ティンク』／メテオ等の魔法攻撃&回復。とにかく小さい

まな『マゼンダ』／炎と風の魔法を使う。炊事担当

第3章草原

ジルバ視点

町から歩き続ける事6時間。時々休憩を取ったにしてもかなり疲れた。そんな時タイムが

「なんか青い物体とかがいる。大体３０ｍぐらい先に・・・」

そんな事を言う。

「一応警戒しておこう」

神龍がそう言って、警戒しつつも進む事にした。そのうちに、距離は縮まっていって大体５ｍ位になった時

向こうから攻撃してきた。

「みんなそれぞれ攻撃できる相手に攻撃して」

神龍がそう指示を出しそれぞれ攻撃を始める。その青い物体を破壊するのにかなりの時間を費やした。

2時間後・・・・

「やっと終わった」

そう言ったのは京太。確かに2時間ずっとやりぱなしだし。

周りには青い物体の残骸の、液体状のものが大量にある。けど液体

と言うよりも粘液と言うほうがいいかもしれない

「けどまだ終わりじゃないみたい。あそこに魔物に襲われてる人がいる」

まなが指差した所には普通の人と、肌が異様に茶色い人に近い魔物が居た。

「まあとにかく殺りますか」

沙智、その発言かなりこわい・・・

マゼンダ視点

近づいていくと魔物のほうは斧、対抗してる人はかなり大きな剣を使っている。

その人は年齢は私たちと同じくらいたぶん男の子だと思う。

「おわっきたか生まれ変わりの１０人」

その魔物はそんな事を言う。なんかよくわからない。

「お前、何者だ？」

神龍が聞く。それに対して

「俺は魔王様の側近３人衆の一人、ソドム様だ」

側近3人衆・・・・あの銀狼とか言うのと同じ・・・ってことは仲間かな？

「お前らなんだよ。俺はこいつとやり合ってんだから邪魔するな」

男の子はそう叫ぶ。だけどその時ソドムとか言う奴に思いっきりきりつけられる。

「気にしないで」

沙智が声をかける

「まあとにかく倒させてもらうから」

そう言って由梨はメテオを繰り出す。それにあわせて私たちも攻撃する。

神龍、駿、コハが、剣か斧できりつけて、麻里江がぼこして、由梨と京太、私がそれぞれ得意な魔法で攻撃してハリが槍を投げてタイムが矢を撃って、沙智が襲われていた男の子を回復する。

簡単に言えば集団リンチだけど。

向こうはかなり弱くってすぐに死んだ。・・・って私たちが集団でリンチしすぎたのかな？

ブロント視点

ソドムを倒し終って、初めて男の子に話し掛ける。その子は黒い上着に黒いズボン、

それに黒い帽子（野球帽みたいな感じ）を深くかぶっている。

「で、君の名前は？」

タイムが話し掛ける。

「・・・ここだと話しにくいから・・・・近くに洞窟があるからそこに行こう」

そう言ってその子は立ち上がり、置いてあった大きな剣を斜めに背負う。

僕たちはその子についていくことにした。

しばらく進んだ所にどうくつがあり、かなりの広さだった。

「俺の名前はシアン。年は１３。これでも女だ」

その子はぶっきらぼうに言い放つ。ふーん・・・・って女？！

「女だったんだ・・」

沙智が言う。見た感じ男だもんな・・・

「よく言われる。だけど、帽子を取ると女っぽいかもしれない」

そう言って帽子を取る。髪は青色に近い銀。長さは肩より６センチぐらい上あたり。

それから僕たちも自己紹介をする。そのあとシアンは

「で、君たちは何してるんだ？」

そんな事を聞いてきた。僕は

「僕たちは、魔王を倒そうと思っているんだ」

そう答えた。

「ふーん・・・・・俺も一緒に行かして貰えない？」

シアンはそう言った。一緒に行くって・・・

「いいんじゃない。大勢のほうが面白いし」

「そうだよ」

まな、麻里江が賛成する。みんなも賛成と言う

「じゃあ決まりだね。これからよろしく。シアン」

「こっちこそ」

こうしてシアンも仲間になって今日はこの洞窟で寝る事にして明日からまた出発だ。

第3章　草原完

第3章草原（後書き）

キャラ紹介

シアン／13才の女の子。一人称は俺。普段から格好が男っぽいため男に間違えられる

第４章古代遺跡

リン視点

朝から、シアンも一緒に歩き始める。大体３時間ぐらいは歩いてると思う。

「なあシアン、ブロント～どこに行くんだ？」

タイムが聞く。行き先を知っているのは神龍とシアンだけ。私達は何も知らない。

「今のところ古代遺跡に行こうと思ってる」

シアンが答える。シアンはやっぱり大きな剣を斜めに背負って黒い服に黒い帽子だ。

「なんで？」

沙智が聞く。それに対して神龍は

「何となく。別に意味は無い」

・・・・・・・何となくって・・・・・・もっとましなこてが欲しかった。

「で、どれくらいでつくの？」

「わからない」

由梨の問いにシアンは答えたけど、これもいい加減と言うか・・・大丈夫なのかな？

ルファ視点

あのやり取りから、５時間。大体今は昼の１２時ぐらい。太陽が真上にあるし。
やっと古代遺跡についた。

「疲れた・・・・」

由梨が早速疲れた発言をする。

「けど休んでる暇は無いみたいだけど」

神龍に言われて周りを見ると、蛇がたくさんいた。

「キラスネークだけじゃなくって、ガーゴイルまでいるし」

シアンが言う。

「キラスネークってなに？あとガーゴイルも」

不思議に思って聞くと、

「キラスネークって言うのはあの蛇。ガーゴイルってのはあの馬鹿でかい鳥」

シアンはそう答えてくれた

「じゃあ一気に殺る？」

さ、沙智の口から微妙に危険発言が・・

「まあとにかく倒さない事にはどうにもならないし」

神竜が剣を抜いて臨戦態勢に入る。結局はそうなるわけだし、やるか。

クロウ視点

キラスネークは思っていたほど強くなくって、あっさりと終わった。だけど、今やりあっているガーゴイルはかなり強い。実際１匹のガーゴイルに対して、
１０人でてこずっている。だけど、

「これで終わりだー」

シアンが飛び上がってガーゴイルに向かって剣を振り下ろす。
ガーゴイルは頭部を割られて、即死。
シアンの剣は大きいから一発一発がかなりの破壊力がある

「ガーゴイルを殺るとは・・やはり生まれ変わりだな」

この前のと似た様なのが何時の間にか後ろに居た。シアンは、

「オーガがリーダだったとはねえ」

「悪いか？俺様は魔王様の側近3人衆の一人ゴーン様だ」

自分で自分の事様付けしてるし・・・・こういうやつって大方、弱いんだよね・・・・

「とにかく、お前も殺るからな」

神龍がそう宣言し、それを合図にみんな武器を構え、

「おう。のぞむ所だ」

相手も武器を構える。

結局はこうなるのか・・・・

ティンク視点

ったくどんだけ体力あるんだこのゴーン（馬鹿）は！！（由梨は今裏モードです）

さっきから30分近くやってるのに、まだ生きてるし。

「テミ、回復頼む」

ハリが沙智に言って、沙智はハリの所に走っていく。

私はさっきからメテオを連発している。みんなも一生懸命やっている。

「いい加減諦めたらどうだ」

ゴーンは、そう言って、斧を構えたまま何故か私のほうに走ってくる。
そう思っていたら、いつのまにか前にいた。
「まずはお前から死ね」
そう言って斧を振り下ろす。やられる・・・・そう思って目を瞑る。

――――――――カキン

金属と金属がぶつかり合う音がする。恐る恐る目を開けると、目の前には黒い服が見えた。
・・・・シアンだ

シアン視点

ゴーンが、ティンクの方に走って行き斧を振り下ろそうとした。そ

の時、俺の中で何かが
吹っ切れたと言うか、不思議な感情がおこった
反射的にティンクとゴーンの間に入り込む。そして剣で斧を受け止める

「相変わらず、愚かな真似ばかりするな、シアン」

「愚かじゃねえ！！お前らのやってる事のほうが愚かなんだ！！！」

そのまま勢いで押し返し、ゴーンを切り裂く。しかし大した傷は与えられず、
せいぜい肩を少し切ったぐらいだ。

「シ、シアン？」

ブロントが声をかけてきたが

「邪魔するな」

それだけ言って再びゴーンに向かう。
しかし、必ず防がれてしまう。このままじゃきりが無い。

「魔王様の生まれ変わりと言っても大したことが無いな。所詮生まれかわりだ」

「俺にはんなもん関係ねえ。今はただお前を倒すだけだ」

俺は確かに魔王の生まれ変わりで、今まで色々やってきた。
だけど、自分がやってきた事はとてつもなく馬鹿な事だ。

それから逃げたくって、魔王の元を去った。
今までは過去を振り返ってばかりだった
けど、もう振り返るもんか
「隙を見せたな」
ゴーンの声が後ろでして、急いで振り返ると斧を振り上げているのが見えた。
「死ねぇぇ」
条件反射で後ろに飛び下がる。が
「っつ・・・・・」
右肩から血が流れ出る。そして剣を落としてしまう。右利きだから右が使えないとかなり困る。
だからと言って左で剣を使えないわけではない。左に剣を持ち、ゴーンに突っ込む。
「なにぃ！？」
ザシュ・・・・・

剣はゴーンの体を貫いていた俺は剣を引き抜く

「俺は前とは違うんだ」

一人でそう言って、剣に付いた、血を払い剣を背負う。軽く体がふらつく。

「ヒーリング」

テミがそばにきて回復魔法を使う。俺の肩の傷は瞬時に消える。

「本当なのか？魔王の生まれかわりって・・・」

ブロントが聞く。まあ、そりゃそうだろうな

「ああ。それに本当は、シアンって名前じゃない。紺田詩央利（コンダシオリ）が本当の名前だ」

その後すべてを話す。話し終わった後

「僕らも本当の名前があるんだ」

ブルースがそう言って、みんなの本当の名前を教えてくれた。それに呼び名も

「じゃあ、行こう。詩央利」

ブロ・・・じゃなくって神龍が言った

「うん」

俺らは再び歩き始める

第４章古代遺跡

完

第４章雪原

シアン視点

本当の名前を明かしたのは２日前。そろそろ雪原に近づく。そのせいか、気温が低い。

「寒いなぁ」

「そりゃそうだろう。ジルバは全身鎧なんだから」

ハリの発言にが京太が突っ込む。まあ金属だから熱の伝わりは早いか。

「今日中に雪原の奴らを殺(や)ってこうよ」

沙智、頼むからその「やって」発言止めて欲しいよ。本当に、

「もう前に居るけど、その連中は」

目のいいタイムは、見つけたらしいけど俺達には未だ見えない。だけど、その一言で皆に緊張が走る

それから５０ｍも歩くと、前に魔物の集団が見えた。

「ゴブリンが居て、リーダーは銀狼(ぎんろう)か・・・」

思わずそうつぶやく

「ゴブリンって？」

「あの豚みたいな奴」

麻里江の問いに簡単に答える。向こうはすでに戦闘態勢だ。

「一気に終わらせよう」

神龍がそう宣言して、皆いっせいに向こうに攻撃を始める

ブロント視点

ゴブリンは3体、僕達は１１人それでもなかなか勝つ事は出来ない。

どちらかと言うと向こうに押され気味。

それでも何とか倒し終わると、

「なかなかだな・・・やはり生まれ変わりか・・・」

聞き覚えのある声が後ろでして振り向く、そこには

「銀狼！！」

詩央利が、半ば叫ぶようにして言う。

「やはり裏切っていたか・・われらのほうに入れば、好きなように出来るのに」

「そんなの俺はのぞまねぇ！！仲間と一緒にいられればそれでいい」

「ふん、所詮生まれ変わりと言っても人間か、ならば此処で死ね！！」

銀狼の言葉が終わると同時に銀狼と、僕らの接戦が始まる。

だけどなかなかダメージを与えるのは難しく、かなりの苦戦を強いられる

ブルース視点

さっきから銀狼に攻撃してるけど近づく事がなかなか出来ない。

まあ僕は近づく必要は無いんだけど。

「ブルース、後ろ気をつけろよ」

「わかってる。クロウもよそ見すんな」

僕の２０ｍ後ろは崖、銀狼は時々地面を揺らす。銀狼が地面を叩くだけでかなりゆれる。

ーーーーーーーーーーガサ

後ろで物音がして振り向くとゴブリンが一匹斧を振り上げていた。

僕はとっさに飛び上がって斧をよけ、更に矢を射る。

矢はゴブリンにあたりそいつは即死。だけど着地した時、

銀狼が地面を揺らしたためバランスを崩し、崖から落ちる。

「あ、タイム！！」

京太の声が聞こえた気がしたけど、そのときにはもう１０ｍぐらい落ちていた。

地面が見えてきた時にはかなりのスピードだったけど、途中で木が生えていて、それに引っかかって、大した怪我をしないですんだ。

「やっと来たか・・」

後ろで声がして振り向くとそこには長く黒いローブを着た女の人が立っていた

「誰？」

「わたし？私は魔王・・」

こいつが魔王・・・

「貴方、私達の仲間にならない？」

「そんなの嫌だ、お前らの仲間になんかならない」

「そう・・・じゃあ仕方ないわね、痛い思いをしてもらわないと」

そう言って魔王は何かを唱える。唱え終わると同時に僕の体の色ん

な所から血が吹き出して雪を赤く染める。

「仲間になる？」

再び魔王が聞いてきた。

「そ、そんなの嫌だ」

そう答えると同時に魔王は笑い始め、

「あら。そう」

そう言う。それと同時に僕の体からはもっと血がでる

僕の意識はそこで途切れた

第3者視点

ブルースが倒れた後、魔王は不気味に笑い出しブルースを連れて崖の上にあがる。

崖の上では接戦に決着がつこうとしていた。それを魔王は眺めている

「これで終わりだ」

シアンが剣を振り下ろし銀狼を切り裂く。そして銀狼は、死に際に何か言ったが聞き取れなかった。

「銀狼を殺るなんて、さすがねえ」

魔王は宙に浮いたまま１０人に向かって言う。シアンは一瞬後ろに下がろうか
迷ったような感じだったが、後ろに下がらずその場にいることにしたらしい

「あ、ブルース！！」

ブロントは魔王に抱えられたブルースを見つけ、剣を再び抜く。
皆もそれぞれの武器を構える

「あなた達じゃ私を倒す事は出来ないわ。いくら私の生まれ変わりがいてもね」

そう言ってシアンのにらみつける。シアンは少し後退りし、体が震えている。しかし

「ブルースを返せ」

そう言ったときの声に震えは無くいつも以上に落ち着いていた。

「それは無理よ。この子にはこっちの仲間になって貰うんだから」

そう言って魔王はそのまま自分の城に戻っていく。

「そんな・・・・」

ルファが、微かに言ったが、皆に聞こえたかどうかはわからない。
暫く沈黙が続く

「取り返しに行こうよ。僕達の大切な仲間を」

クロウがそう言う。それを聞いて、

「そうだよ。タイムを取り戻して、魔王を倒そう」

ブロントが言ったのをきっかけに、皆歩き始める。

第４章雪原完

第４章雪原（後書き）

だんだん終わりに近づいてきました。
果たして、彼らの運命は？

第６章大切なもの　（前書き）

大切な仲間を取り戻すため、魔王の城に乗り込む１０人。
そこでであったのは・・・

第6章大切なもの

シアン視点

雪原から歩き続けて、もう魔王の城は目の前に見えている。さっきから話しているのはどうやってタイムを取り戻すか。

「とにかくその場の勢いで」

「ブロント、さっきからそればっかり言ってない？」

神龍の発言にまなが突っ込む。確かに方法としてはそれしか浮んでこない。

「とにかく魔王を倒せばそれでいいんじゃないの？」

麻里江が（たぶん）一番まともだと思う方法を言う。だけど言われてみるとそうかもしれない。

「じゃそう言うことで」

神龍がまとめる頃にはもう魔王の城の門の前だった。門は開け放たれていて、俺らを誘い込む様だった。

だけど俺らは迷わずに中に進む

入ってすぐにゴブリン等が守りを固めていた。だけど今の俺らに倒せないような相手ではなかった。

「こんな所さっさと乗り切っちゃおう」

由梨が言う

「そうだね殺ちゃおう」

沙智、頼むからその危険発言止めて。

そう思いつつもさっさと倒すことにした

ジルバ視点

「これで終わり♪」

由梨が最後の一体にとどめをさす。

それよりも、語尾に音符をつけるな、怖いよ逆に。

「やっぱり負けたかぁ。ま、所詮雑魚だし」

聞きなれた声がきこえ、声がしたほうを向く。

そこには、青い髪黒っぽい緑の鎧・・・タイムがいた。

「タイム！！・・・・」

神龍が声をかける。だけど、タイムはそれを無視して、

「雑魚じゃ不可能なら、俺がやるか」

そう言って本来使わない剣をかまえ、僕らに向かって走ってくる
僕らは一回タイムの持つ剣の範囲から離れる。そう言えば、さっきからシアンがいないような気が・・・
シアンの事は置いておいて、いつまでも逃げ回ってるわけには行かない。そんな時神龍が、
タイムの振り下ろした剣を受け止めタイムに話し掛ける

「いつまでやるつもり」

「全員殺すまで」

「何でだよ」

「敵だから」

「仲間だったじゃないか」

「は、なにいってんだよ」

再びタイムが剣を振り下ろし神龍も再び剣の範囲から離れる

ミドリ視点

神龍と、タイムのやり取りを聞いているうちにいらいらしてきて、
最終的には・・・

「タイム！！ざけんじゃねーぞ。なに考えてんだお前は！！いい加減にしろ」

思いっきりぶち切れてしまった。

「うるせえ。黙ってろ」

はあ。うちの場合言い返されると更に怒鳴りたくなるんだよなぁ

「んだと、本当になに考えてんだ！！この前まで一緒にやってきた仲間じゃないか！！」

「俺に、仲間なんていない。それに、今はお前達を殺すだけだ」

そう言って普段使わない魔法を唱える。

「ダークサイクロン」

唱え終わると同時に、巨大な竜巻が現れ、こちらに向かってくる。京太と、まなが顔を見合わせたあと、

「「サンダーサイクロン」」

二人で一つの魔法を唱える。

2人が作り出した竜巻と、タイムの作り出した竜巻がぶつかり、爆発が起きる。

結果的には、あの時と同じように、壁に叩きつけられる。

「これでとどめを刺してもいいんだが、止めて置こう。所詮死に損ないか」

そう言ってタイムは、この部屋から出て行こうとする。

「タイム、ふざけんな！！」

神龍はそう叫び、持っていた剣を投げつける。
その剣は真っ直ぐ飛び、タイムの左肩に刺さる。

タイムは振り向き、剣を抜きながら
「そんなに死にたいのか、死に損ないめ」

タイムが刺さった剣を床に投げ捨てると、剣は剣先１０センチほどを残して粉々に砕ける。
そして再び剣を構えこちらに向かってくる。

そんな時、

「ストップタイム」

聞き覚えのない、だけど懐かしい声がした

クロウ視点

急に、タイムの動きが止まる。つまり、時が止まった

「やっぱり生まれ変わってもこうなるのか？ブルース」

「しらねぇよ」

後ろで再び、声がきこえる。皆ほぼ同じタイミングで振り返る。
そこには僕らにそっくりな１０人がいた。

「もしかして・・・・ブロント？・・・・・」

神龍が真ん中にいた金髪の戦士に声をかける

「ああ、そうさ。お前らの前に俺らが、魔王を倒したんだ」

「ちょっと、ブロント止めてられるの少しなんだから、用件伝えないと」

「わかってるよマゼンダ」

軽くそんなやり取りをしていたが、簡単に僕らを見渡して、

「ブルースとリン、シアンに伝えて来てくれ」

「了解」

「わかった」

ところでシアンはどこにいるんだろう？そう思いつつもブロントが
再び話し始めたので話に集中する事にした

「お前らに言って置くよ。とにかく、このあとはシアンに任せろ。
あいつなら何とかしてくれる」

「え、でも・・」

「大丈夫だよ。シアンなら」

コハの発言の途中で、ミドリが言う。

「シアンは前にもやってくれたし」

ルファが、ミドリの後を継いで答える

「そろそろ時間が・・・・」

ティンクが言う。

「わかってるよティンク」

「じゃ、そろそろシアンから声がかかるな」

ジルバ、ブロントが言った後、その予想どうり、

「神龍、魔法が解除されたら、タイムの事をなるべく真ん中辺りで抑えて、他の皆はなるべく壁の方によってて。へまはしないと思うけど、もしもミスったら大変だから」

シアンの声が上のほうから聞こえた。よく見ると、上のほうに、バルコニーみたいなのがついていて、そこにシアンがいた。

「何をやるつもり？」

「実行してから話す」

由梨が聞いたのをあっさりかわして、何かを構える。

「よし、マゼンダ、切って平気だ。全部伝えたし」

ブロントがマゼンダに合図する。

「ちょ、一寸待って、もう少し聞きたい事が・・」

多分魔法を切ったらこの人たちとは話せないと思い、声をかける

「大丈夫だ。あいつを何とかする頃にはもう一回話せる」

クロウが答える

「じゃ、いいね」

マゼンダが言って、魔法を切る。

途端に時が流れ始めタイムが再び僕らの方に向かってくる

ブロント視点

僕はシアンに言われた通り、タイムを抑えるために一回タイムに足をかけて転ばせる。

そのとき反動で、タイムの剣が飛ぶ。素手になったタイムを何とか押さえると同時に、

「神龍、すぐに壁側にもどれ」

シアンの声がきこえ、シアンが降りてくる。

僕はすぐにみんなのいる位置まで下がる。

「さてと、本領発揮かな？」

そうシアンは言うと何時も使っている剣を切っ先を上にして左手を剣に添える。

「我、うつし鏡の力受け継ぎし者

その力を解放し、汝解き放たん」

そう言うと同時に、剣が光だす。それに呼応するように壁が光り始める。

そしてタイムが苦しみ始める。

僕らはあまりの眩しさに、目をつむる

光が消えるとそこにはタイムが倒れているだけだった。

第3者視点（今後はずっとこれで行きます）

「タイム！！」

皆がほぼいっせいにタイムの所に行く。それと同時に、さっきの10人も再び現れる。

「あ、あれ？僕何してたんだろう？」

タイムが起き上がり一番に側に着いた、由梨に訊ねる。が・・・

バシッ

「バカ！！心配したんだから」

由梨はタイムの頬に平手打ちを食らわせ怒鳴った後泣き出す。

タイムは何が合ったのか更にわからない顔をし、
みんなは少しずつ何があったのかを説明し、タイムも納得する。
「やっぱりあの時と同じ展開だな」
「確かに。あの時も最初にリンにひっぱたかれてなかったか？」
「そうだったな。あれはかなり痛かったよ」
「ブルースあんまり言うなら、もう一回ひっぱたこうか？」
ブロント、クロウの言った事にブルースが反応する。それを聞いて、
リンはブラックスマイルを浮かべながらブルースに近づく。
ブルースが後退りし、リンが手をあげた時
「じゃ、タイムも戻ったし、行こう」
ブルースにとってはグッドタイミングと言いたくなるようなときに
神保が言う。
「そうだねさっさといこう」
古柳が答え皆して歩き始める
第６章大切なもの完

第7章　終決と別れ、それに・・・・（前書き）

いよいよ最終章です。
果たして彼らはもとの世界に戻れるのか。

第7章　終決と別れ、それに・・・・

魔王のいる所に行くには時間はかからなかった。

そして

「ついに来たか、それではすぐに始めようか」

魔王がそう言った直後扉の前から2メートルぐらいの所まで床が抜け抜けたところは溶岩が煮えたぎっている。

「これじゃあ、落ちたら即死だな」

「まあとにかく、そのことは考えずに・・」

クロウと駿、二人のクロウが言う。

「一気に行くよ」

龍太郎が宣言していっせいに魔王に攻撃を仕掛ける。

皆、先代（？）が使っていたものを使って攻撃している。

「あーもうきりがない！！」

遂に由梨が音を上げる。

「皆、少しだけ時間稼いでほしい。御願い」

詩央利が言って、皆から少し離れる。

「わかった」

近くにいた一毅が、答え皆に伝える

「まさかシアン・・いや、詩央利はまたやるつもりか？」

「たぶんそうだと思います」

ブロントと、テミがはなしている

全員の攻撃が強くなった時、

「皆どいて」

詩央利が走りながら言う。右手には剣を構えて・・

「まさか・・・・詩央利！！やめろ」

神保は、詩織利がやろうとしていることに気づき、止めようとするが、そのときには、すでに詩央利は魔王に突っ込んでいた。

詩央利の剣は魔王の心臓をしっかり刺していた。

だが、魔王の剣も詩央利の体を貫いていた。
詩央利が倒れるより前に魔王は

「これで終わったと思うなよ・・・」

再び同じ言葉を残して爆発して消える。それと同時に詩央利も倒れ、その体がかすかに光り始め消える。

「な、なんで、きえ・・・」

「風とともに来た者は風と共に去る、水と共に来た者は水と共に去る。死を纏(まと)いてきたものは死して去る」

彩の言葉を遮り、テミがきれいな声で歌う

「それは？」

「これは私の生まれ故郷に伝わる古い歌です。シアンさん・・いえ、詩央利さんは死と共に来たんです。だから・・死ぬことによって元の世界に戻ったんです」

沙智の問いに対して、テミは落ち着いた口調で答える

「お前らももう帰らないといけないみたいだな。足元、見てみろよ」

ジルバに言われて足元を見ると、かすかに足元が光っている。

「お別れだね」

「ええ、さよなら」

京太郎の発言に、ルファが答える。

更に光が強くなり皆を包み込む・・・・・・・・・・

光が消えるともとといた教室にいた。外はもう夕暮れ。

「今までのはなんだったんだろう・・・」

「さあ？」

少し会話をしていた所に、

キーンコンカーンコーンキーンコーンカーンコーン

「あ、放送行かなきゃ！！」

谷澤が慌てて駆け出す。もちろんランドセルをつかんで

それとほぼ同時に

「こら！！お前らまだいたのか！！早く帰れ」

先生に怒鳴られ、慌てて教室からでる

『下校の時刻になりました。事故に気をつけ急いで帰りましょう』

下校の放送が入り、暫くして皆のいる昇降口に谷澤がくる

「なんだったんだろう本当に」

「さあね。だけどわかってるのは、僕らはいろんな事をやったってことだよね」

神保の疑問に対して、湯島が言う

「じゃ、今日は帰ろう」

古柳が言って、皆で家路に着く

翌日
「今日は何しかけようか？」
何時ものように、悪戯会議が開かれる。
「じゃあドアに輪ゴム付けとかない？」
「じゃそうしよう」
「本当に頼むけど、散らかさないで」
「はいはい」
そして、先生が入ってきた。しかもトラップを仕掛けた前ではなく後ろから
みんなが驚いていると、
「お前らのやる事はわかってる。とりあえず出席と、転校生の紹介だ」
そう言って出席を取り、転校生を呼ぶ。
その転校生は・・・・・
「紺田詩央利です。宜しく御願いします」

紺田だった

休み時間、みんなして紺田に声をかける

「無事だったんだね」

「まあね。けど皆と過ごせてうれしいよ」

「アノ世界は何だったの？」

「簡単に言えば、アレはこの世界の未来。だから、アノ世界を救ったってことは、未来を救ったんだよ。俺らは」

「そっか」

暫く黙り込むが、神保が

「ねえそろそろまた考えよう」

と声をかける

「うん」

「ねえ詩央利、どんなのが良いと思う？」

「うーん・・・・・まず、ドアの取っ手の部分に画鋲（がびょう）をつけといて、黒板消しを上にかけるとか？」

「由梨並に黒いな・・・」

「京太、なんか言った？ってかそんなに実験台になりたいわけ？」

「らしいよ由梨。ねえ京太」

「もう、いい加減にしてよ。あと片付けする方の身にもなってよ」

そんな楽しい（恐ろしい？）話し合いは暫くの間続いた。

第7章完

エピローグ

エピローグ

二つの世界

いつもそれは裏にある。

それは未来であり、

過去である。

１１人の冒険は終わった

いや、終わってない

これからが本当の冒険だ

エピローグ完

ほら足元を見てごらん　これがあなたの歩む道
ほら前を見てごらん　あれがあなたの未来

母がくれた　たくさんのやさしさ
愛を抱(イダ)いて　歩めと繰り返した
あの時はまだ幼くて　意味など知らない
そんな私の手を握り　一緒に歩んできた

夢はいつも　空高くあるから
届かなくて怖いね　だけど追い続けるの
自分のストーリーだからこそ　あきらめたく
ない
不安になると手を握り　一緒に歩んできた

そのやさしさを　時には嫌がり
　離れた　母へ素直になれず

ほら足元を見てごらん　これがあなたの歩む道
ほら前を見てごらん　あれがあなたの未来

そのやさしさを　時には嫌がり
　離れた　母へ素直になれず

ほら足元を見てごらん　これがあなたの歩む道
ほら前を見てごらん　あれがあなたの未来
ほら足元を見てごらん　これがあなたの歩む道

ほら前を見てごらん　あれがあなたの未来
未来へ向かって　ゆっくりと　歩いてゆこう
未来へ

DERK

and　LIGHT完

エピローグ（後書き）

これで『ＤＥＲＫ　ａｎｄ　ＬＩＧＨＴ』完結です。
これは、知っている方もいらしゃると思いますが、
シフトアップネット様のテンミリオンというゲームの小説掲示板で
書いていた小説です。
今回はそれをそのままこちらにアップしました。
作者名のＬＩＧＨＴもこの作品からです。

今までこの作品を読んでいただきありがとうございました。
宜しければ感想などをいただけるとありがたいです。

まだ、完結していない作品がいくつかありますが、そちらは受験が
終わるまで更新ペースは亀並に遅くなります。
ですが、読んでいただけるとありがたいです。

最後のほうは宣伝になってしまいましたが、これで後書きを終わり
にします。
『ＤＥＲＫ　ａｎｄ　ＬＩＧＨＴ』を最後まで読んでいただき、誠
にありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7871c/

DERK and LIGHT

2010年10月10日21時02分発行